

レオノーレ
あるいは月影と水車

Leonore
or The Moonlight and a Waterwheel

井坂
康志

A man who does not exist,
A man who is but a dream;
And cried, 'Before I am old
I shall have written him one
Poem maybe as cold
And passionate as the dawn.'

William Butler Yeats, 1865-1939,
The Fisherman, *The Wild Swans at Coole*

見えず聞こえずとも
日々絶えることなく
守り、支え、励まし
導いてくれる方々に――

目次

古井戸——序に代えて……………8

野の草の悲しみ

(ひとつ詩ができるということ)……………13
 もういちど子供になれたら……………14
 線路に咲く……………16
 (きみがわらう)……………18
 おやすみ……………19
 下校時……………21
 なつかしさとやさしさと……………22
 (もしもいつか)……………23
 虹……………24
 (いったいこの世界は)……………25
 蒼き花……………26

あどけない月影……………28
 春の野……………29

ため池へ続く野道

風に額を洗われて……………33
 木漏れ日……………34
 涼やかな風……………35
 可憐……………37
 藤棚の下で……………39
 ノクターン——夜想曲……………40
 永野川……………42
 アート・ガーファンクル……………43
 手巻きの時計……………44
 赤レンガ……………46
 夕暮れのプラットフォームで、今も……………47
 川べり……………48

ぼくには見える

49

会えない時の音もなく

月影と水車

53

(無題)

58

往こう、大きな船で、月と

59

蒼き水車

61

(やがてわかれがやってきて)

63

朝

64

旅人

65

大山

68

三之宮比々多神社

71

銀座の雨

73

(語るにまかせよ)

75

室

76

死者たちを讃える歌

墓標

81

孤独

84

アダム・チエルニアコフに捧げる詩

85

カトヴィツェにて

90

影

93

東へ

95

黄金の酒蔵——死者たちを讃える歌

97

春の宵

100

ちいさな神の暮らす丘

101

硫黄

103

道標

104

天上の序曲——レオノーレ第三番

105

古井戸——序に代えて

つるべみたいに

冷え固まった自我を

こんなふう

言葉が古井戸から

引き上げてくれる

ついさっきまで

地中を流れていた

清らかな泉みたいに

水が生まれてきた霊でなかったら

いったい何なのだろう

言葉が魂をすくいとり柄杓でなかったら

いったい何なのだろう

野の草の悲しみ

過去の奇跡、やがて来る時代、
不可思議の数々よ、
この胸より失せてくれるな。
光明の清き泉が、
つらい夢をすすいでくれた
この地は永遠にわが胸にとどまれ。

—ノヴァーリス『青い花』（青山隆夫訳）より

（ひとつ詩ができるということとは）

ひとつ詩ができるということとは
ぶかつこうでもぶざまでも

野原のはずれに小屋を建てたのと同じこと
路^{みち}や茅^{かや}や枯れ枝で組まれた小屋も
ことりの雨宿りくらいになるだろう

もういちど子供になれたら

もういちど子供になれたら
みずいろ汽車に飛び乗って
知らないあの街に出かけて
子供のきみを探しに行こう
野に咲くたんぽぽをひとつ
つんで窓辺のきみに渡そう

もういちど子供になれたら
大人のぼくに教えてあげる
風や雲、砂や小石の教える
あのやさしく美しい物語を
ちいさいいきもののみ知る
雨の歌や野の草の悲しみを

もういちど子供になれたら
みずいろ汽車に飛び乗って
波打ち寄せる海辺に向かい
大人のきみを探しに行こう
丸いガラスとしろい貝がら
うつむくきみのてのひらに

線路に咲く

線路わきの

土手の斜面に

咲く

かぼそき双手を

かの空いつぱいに

陽ざし浴びて

黄金の花弁

生きよ

生き続けよ

風に遊び

雨に弾かれ

白き鉄路の果てを
遠く見つめて

(きみがわらう)

きみがわらう
たのしそうに
はずかしそうに
きみがわらう
天国はここにある
死ななくてもいける
天国がここにある

おやすみ

伸びる影に
指先を結び合わせ
凍る星々の
夜空を今夜も照らす
あのくすの巨木の下で
そうであつたかもしれない日々の
そうであつたかもしれない物語を
いつまでも語り続けよう

僕らの遠い雲だった時代を
月だった頃の記憶を
山奥の鉱物だった太古の
呪文を今唱えよう
永遠にいたる秘密のマントラを

自分が世界で
世界が自分
魂がそう語りかけた
あの瞬間

土曜の昼下がり
小学校から帰る
春の日の
虹色のどぶにかかる道
白く霞のたなびいて
重い竹藪
錆びたはりがね
湿った土の匂い

下校時

おやすみ

なつかしさとやさしさと

なつかしさとやさしさは
時に同じ歌をくちずさむ
アスファルトに
うつむくすみれのように

伏せたまつげ
陶器のような白い肌
つややかな黒い瞳

なつかしさとやさしさは
時に同じ歌をくちずさむ
アスファルトに
うつむくすみれのように

(もしもいつか)

もしもいつか
その涙を渴かせるなら
この春の野をわたる
一陣の風になりたい

もしもいつか
その喉を潤せるのなら
春のゆるむせせらぎの
一しずくの水になりたい

もしもいつか
その心が冷えたなら
たった一つの魂をやさしく温める
一人の詩人になりたい

虹

日がな一日横になり
こだまに耳を傾ける
驟雨しゅううの合間
雲のぐらぐらと駆け
森に消えていく
太陽がさしはじめる
身を起こすと
いつの間にか虹がかかっている

(いったいこの世界は)

いったいこの世界は
美しき小さな英雄を
どれほど破滅させてきたろう
いったいこの世界は
名もなき高貴な魂を
どれほど損なってきたろう
真夜中夢に起こされて
天井のしみと
わが心の
問わず語りに語ってる

夢見つつ
目覚めよ
道辺に咲く
蒼き花たちよ

蒼き花

目をつむり
夢見つつ
目覚めよ
道辺に咲く
蒼き花たちよ

ちいさい
結び目のような
核のおびただしく

雲と語り
風と戯れ

目をつむり

あどけない月影

うすむらさきの
色汁のこぼれ出で
春の明け方
野の露に溶け
あどけない月影となる

春の野

つめたい血のひとしずく
蒼き魚たちの泪
胆汁に黄色くふちどられ
春の野には
あの日のためいきの
今もそのままに
靄もやとなって地を潤す
女神の首筋のように
緑は田野をうめつくし
ひばり啼く地平に
紺碧こんぺきの大気の
血を吐く土と

生温かく混じり合う

私はこう思わずにいられない
春の野は何を隠しているのか

ため池へ続く野道

月に照らされた僕の影
それだけが旅の道連れ

——ミユラー「おやすみ」(『冬の旅』)

風に額を洗われて

朝露に濡れた野道を
この一本の細い道を
ひとり歩いてゆく
なぜかたまらなくゆかしくて
そしてたまらなくなつかしい
どこかでひばりの声もする
春の温かな風に額を洗われて
野原いちめんの
濃い緑のじゅうたんに
ぼくは新しくなる

木漏れ日

よしんば**ぼく**が
あふれんばかりの財貨を
地位を名声を
手にしたとしても
それが何になる

あのとぎの白い道をたゆたう
みずたまの影に
あるいは夏の肌を透く
一陣の風に
あるいは新緑に陰る
まだらの木漏れ日に

決して追いつけはしないのに

涼やかな風

灼熱の苦しい一日も
夕べの野をわたる
涼やかな風が
だきしめてくれる
慰めてくれる
心を
ぼくたちの心を

下りてくる
蒼い大気が
大地をつつむ
丘の上から
なよぶ草を透いて

大きな夕陽が落ちていく

灼熱の苦しい一日も

夕べの野をわたる

涼やかな風が

だきしめてくれる

慰めてくれる

心を

ぼくたちの心を

可憐

君よ、憶えている

はじめて会った日のことを

君よ、リノリウムの鈍い廊下に

午後の薄日が茜に射し込み

君よ、その手その瞳

今も古い歌を唄ってる

君よ、いくつかの薫風に

つばめが時々啼いていた

君よ、あのけざやかな朝

木陰を薄く透かす光

君よ、だから七重に時がめぐっても
誰にも言わせはしない

君よ、あのときが

人生でいちばん美しかったなどとは

君よ、魔法を解こう

あの取っ手に手をかけて

名を

君の名を呼ぼう

もう一度出会う、あの丘で

藤棚の下で

生乾きのワイシャツのにおいが

温かいシャワーのような

夏の雨をつれてくる

あの公園の藤棚に逃れると

そのつややかな前髪から

レモンのしずくがしたたり

えもいわれぬ

トパーズ色の幻を見る

ほんとうにあったことなのだろうか

藤棚の下

真夏のフィルム

ノクターン——夜想曲

そのくちびるの

やはらかさ

さても夜ごとに

想うはそのこと

こころもち

くびをかしげて

頬をつたう

その涙の

切なさよ

湖上にぶなの

葉を浮かべ

その手を取り

漕ぎ出せば

その涙よ

銀の波

皺よる湖面の

清らかさ

夜ごとに想う

寄る辺なさ

永野川

しめやかに

さても涼しき

永野川

血を吐く夕日を

背に受けて

土手に

こぐペダル

ぼくらの影が

貧しい民家のとたんの塀に

黒く鋭く

映ってる

アート・ガーファンクル

高原をわたる

風に似た遠い声

かすかに湿り気を帯びて

ガラスの小麦の

澄みわたる響き

アート・ガーファンクル

あなたの優しさ

愛と哀しみの

今も魂にひたりくる

手巻きの時計

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

針は動きを止め

納屋に置かれたままの

固いブリキのねじを巻いてください

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

化石した自我に温もりの戻り

茜色の時間の動き出す

固いブリキのねじを巻いてください

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

ライアーを弾くように

草地で額に手をかざすように

固いブリキのねじを巻いてください

赤レンガ

逝く夏の陽光の

虹色のガラスに射し

真紅のウイスキー

埃っぽい空気

煙草の匂い

水色のワンピース

真っ白な靴

赤いリボン

細い指

まだらの海の底

茜なす遠い面影

夕暮れのプラットフォームで、今も

夕暮れのプラットフォームで、今も

さようならと両の手を振る

関東平野の土埃の匂い

やはらかな重たい風

黒い切り絵の山並み

駅舎の瓦は代赭色

うすく汗をかいて

夕暮れのプラットフォームで、今も

さようならと両の手を振る

川べり

五分だけ、いや十秒でいい

川べりを歩きながら

かえるの声に耳を傾けてみたい

生ぬるい川底をざりがには這い

水生の虫の土煙を斜めに切る

世の何もかもを思い煩うことなく

ひたすらにせせらぎと

波うつ黄金で

からつぽの心を

からつぽのままに

ぼくには見える

ぼくには見える

蛇口のしずく

水気を含む風

尖ったとたんの塀

教室の隅の長い影

ため息と頬をつたう涙

ぼくには見える

求めてやまぬ

失われた声

愛を求める

死にたいくらい

永遠に損なわれたその瞳

大平のひとひらの雲

ぶどう園から

ため池へ続く野道

会えない時の音もなく

天使にはただ素朴なものを示せ。世代から世代にわたって形成され、
われわれのものとして手に触れ、まなざしを注がれて生きている素朴なものを。

——リルケ『ドゥイノの悲歌』（手塚富雄訳）

月影と水車

——瀨崎夫妻に

水車はひとつ

白い月の晩に回る

苔むした緑の環^わは

音もなく回る

月は黙して

池の鏡面に浮かぶ

寝静まった都会の屋根を

静かに照らす

公園の猫の毛を

柔らかくしめらせ

故郷に帰る人を見守り

月は白く浮かぶ

水車は研ぐ

魂のよろこびを

しずくを散らせ

深き森に降り注ぐ

水車は回る

秋の天空のなか

いびつで名もなき

優しい人生とともに

水車はひとつ

ただ二つの環とともに

確かめ合うそして

世界は復元される

右は左になり

上は下になり

山は谷になり

丘は海になる

そこに試練と呼ばれるものがあるのなら

乗り越えればいい

なんでも、なんどでも

それは希望の別名なのだから

広い天空に浮かぶ月よ

見下ろしてほしい

やさしい銀波に

回る水車を

ひたしてほしい
この清らかな宴を
やはらかな秋の陽で
風わたる紅の洪水で
水車はめぐる
自らを遍在させ
森や丘を養い
優しき時はめぐる
白い玉砂利を濡らす
気高き水のごとく
洋々として
水車はめぐる

今日も

明日も
その明日も
さらにその明日も
われらの父祖が
生きてきたように
変わることもなく
そして
永遠に

（無題）

しあわせだよ
今

おとなになるのが
とてもくるしかったから

こんなふとした風にも
涼を感じる

往こう、大きな船で、月と

大きな船で、往こう

潮は猛^{たけ}くさかまけども

大きな船で、往こう

やがて救われる者たちのために

黙しえぬ者どもよ

時は満ち、かの船は入ってくるだろう

大洋に白き月が立ち昇るだろう

風は凧^{ふう}ぎ、一瞬の息をひそめる
ときが来るだろう

大きな船よ、満つる月よ

今よりほか

往くべきところはなく

去りゆくべき時はない

蒼き水車

——萩原朔太郎に

蒼き水車よ

回れかし

凍れる夢の咲く岸の

醒めたる血潮の凜々と

けぶれる地平に広がりて

月は東にかたぶけり

蒼き水車よ

回れかし

さても艶めく死のごとく

苦き沈黙しじまの過ぎゆくごとく

わが精神の思惟せんは

今も何をか憂ふらむ

蒼き水車よ

回れかし

俯きかけたる雛芥子ひなげしの

石笛囁く春の宵

不吉なるかな暗き淵

今かの環は沈み去れり

(やがてわかれがやってきて)

やがてわかれがやってきて

会えない時の音もなく

無色の津波でゆつくりと

扉は永遠に閉ざされて

真昼の空を見上げてみれば

そしらぬ顔であの月が

失われた遠い物語を

今日も語ってくれるだろう

やがてわかれがやってきて

暗い潮が満ちくるように

雪雲の薄くもつれるように

会えない時のゆくりなく

朝

朝は教えてくれる

頭が思考するのではなく

思考が頭をつくつたと

眼が光を認識するのではない

光が眼をつくらざるをえなかったと

朝は重ねて教えてくれる

生は島で

死は海なのだと

生は海底から延びた

死の突端に過ぎないと

旅人

日の出の巨大な太陽が

大河の果てから

ぐらぐらと音を立てて

揺れながら

カイン

生けるものも

死せるものも

老いも若きも

牛も魚も木も草も

照らす幻影を見た

カイン

君は成就する旅に出た

それは美しいことだった
褐色の肌
絹の光沢

カイン

ゆくりなくもはてしない
世界という大鍋に
君という素材を
煮る旅に出た

カイン

怖がることをならいに
君は旅に出た
ほのかに硫黄の匂いが
漂ってくるようだ

カイン

やがて曼珠沙華の
いっばいに広がる
丘に出る

君とそこで

再び出会うのだろう

カイン

大山

緑波うつ丘を透いて
黒土をやはらかに潤し
葉脈したたる水路のはて
やがて相模の大洋と合一する

海老名

江の島

湘南平

果ては大磯より

かの山をのぞめば

かつて海が月と一つだった頃
あるいは地水火風の
龍たちが環を成したあの頃と

今も変わらぬその姿
誠に神霊のつくりたまいし
懃いさおしの歌

かの富士より遠く神人となり
太古モーセをつつむ

万軍の秘蹟

神の宿りし霊峰に

一滴の墨汁淡く

綾あやなす雲間のスクリーンに映じ

今宿命の転変と憂苦を知る

あんまりのどやかに

こともなげに

なまあたたかい

春の風に土煙

薄紅にひたされる

三之宮比々多神社

木の鳥居をくぐり

やはらかな水に手を浸せば

大山の冷気の

小川のたまりにも似た

清冽な一隅にいたる

鋭利な一本杉の先端は

落雷に焼かれ

なだらかな丘から

相模の大海までも

みはるかすようだ

華美なものはなく

誇るものも

引き立たせるものもなく
ただ数千年ここに
いつづける神々

あなたの表情は
街角の豆腐屋の主人の
恥ずかしそうな笑顔を
私に思い起こさせる

まだらの午後の陽ざしが
けやきの葉陰から
薄く漏れている

銀座の雨

雨降りしきる銀座の街で
昼やはらかな夢を見る

青白き貴婦人のつれだつ姿
右手に重たく洋燈を掲げ
古い賛美歌を口ずさみ

ストックホルムの白夜の晩に
牧師館に向かう一行の
野道は沼気につつまれる

今降りしきる銀座の街で
今日も真白の夢を見る

ヴェール帽子に上衣を羽織り
青い葬送の一行は
遠く森鳴る風を聞く
雨降りしきる銀座の街で
あの葬列にすれ違う

(語るにまかせよ)

涙は落つるにまかせよ
ため息はこぼるるにまかせよ
時は流るるにまかせよ
万物は過ぐるにまかせよ

日々と格闘するな
早足をやめよ
息を吐け、吐き切れ

語るにまかせよ

室

枝を透く風のざわめき

山の歌を聴きながら

私は室にはいたい

思い出だけをたずさえて

山里のからすの声

雪国の静かな夜

ゆつくりと思い出そう

私の生まれた日のことを

不条理のために世を去った

幾千もの善良な魂を

室のなか

眠るように

あたたかな黒い土に

ゆつくりしみこんでいく

水のように

夢見ている

夢を見ている

室はやがて閉じられ

鹿たちのふみしめる

腐葉土となる

ふたたび開くことはない

きつと私がいなくなっても

からすは鳴くのだろう

雪は舞うのだろう

永遠にもう

悲しむことはない

死者たちを讃える歌

地獄で人となっても、堂々と顔を前に向け続ける神のごとき人だつてこの世にはいる。そんな本物の魂に触れてみたいなら、ペートーヴェンに耳を傾ければいい。

——ニーチェ『反時代的考察』

墓標

偽りの文明を支える

うつろな人々

顔を持たぬ人々

さあ武器をとれ

霊の武器を

不戦の誓いは破棄された

言葉の剣

意志の胸当て

隠喩の甲冑

論理の盾

武器をとれ

叡智の鉄と詩の水で

サーベルを鍛えよ
 とほうもない暗黒
 心許せるものなど何もない

ワルシャワの地下水道で
 汚水にまみれ斃^{たお}れた
 あの同志たちを思え

カンピノスの森で
 早朝頭を撃ち抜かれ
 自ら掘った穴に落ちた女たちを思え

卑屈や軽薄を許さず
 断固として武器を棄てなかった
 あのささやかな人たちを

救済はどこにあるか
 見回せば――

信ずるに足るものなど
 あつたためしはない

肩に食い込む十字架
 勇気が

勇気だけが
 僕たちの墓標だ

そこには血の文字で
 こう書かれている

「自らの時代とたたかう人」

孤独

孤独ならざるリユンケウスがあるか

物見の魂に

見るために生まれた目に

大洋ほどの涙の

湛えざることがあるか

美しくありつつ

悲しからざるものがあるか

心情でありつつ

運命につらなることなきものの

この世界にあるか

アダム・チエルニアコフに捧げる詩

あなたに会いにやってきた

極寒のワルシャワ外れの

黒い霧降るユダヤ人墓地に

一人佇む

人からも

ユダヤ人さえからも

やがて世界からも知られず

一人執務室で毒を仰いだ

孤独な人

チエルニアコフ

あなたはワルシャワ・ゲットーの

ユダヤ人協議会の議長
元は電気技師

誰の目にも政治とはほど遠い
だからナチスの連中も
あなたを無害と思ったにちがいない

チエルニアコフ

息子ほどのナチスの将校に

時に嘲辱され

時に軍靴でこづかれて

あなたの人生で

世界はすでに十分過ぎるほど

失われ尽くしていた

やがてあの移送がはじまって

パヴィアク刑務所に

コルチャクの子供たちが集められ

ウムクラーシュプラッツから

引き込まれた鉄道で

一人残らず

トレブリンカに消えたのを知ったとき

あなたは人生で初めて

内臓液の、脳漿の一滴まで

搾り尽くして

泣いたのだ

涙があなたの丸眼鏡の縁にたまり

絶望の嗚咽が執務室にこだまする

私は願わずにはいられない

この小さな石を置いていこう

暁の窓に一つでも
金の星が
ちいさく瞬いたことを

少なくとも彼が
絶望の孤独の中で
死を選んだのではなかったと
そう思えるから

もうじき日は暮れる
ワルシャワの街が夜気に包まれる
ユダヤ人墓地にもちろん人影はない

浪費された世紀の英雄
アダム・チェルニアコフの墓碑に
ユダヤの古い慣例にならない

カトヴィツェにて

カトヴィツェ駅の木の椅子に

腰かける老婆

あごの皺はたるみ

その鼻先の獰猛さ

茶色い埃っぽいスカーフが

クリスマスのつめたい風になびいている

カトヴィツェの老婆

スターリン時代に娘だったあなた

小さく艶やかな黒い目だけが

可憐だった少女の歌を

今もやさしく歌ってる

革命を忘れたか

カトヴィツェの老婆

今はツェルノヴィッツの農家に嫁いだ

娘に会いにでも行こうというか

あなたの姿が惹きつける

地獄のふたが開いたとき

浪費された世紀を生きたあなたが

私の胸の奥の何かを打つ

小さな手提げから

おもむろに黒パンをとり出して

大きくちぎって口にする

カトヴィツェの老婆

もう共産主義は流行らない

イデオロギーはみんな

ネットとデジタルで
空しく神経回路に埋められた

あなたは何も翻さぬ

何ものにも動かされぬ

そして何の言葉も発せぬ

カトヴィツェの老婆

あなたはどこかしら母に似ている

影

詩人よ、君の仕事をなせ

あの古い成句にあるように

君は夢を解く人

暗くはてしない

地下をさかまく汽水湖の

潮目を読む

詩人よ、それは君の仕事だ

言葉は黄泉の鳥に似て

その予兆の予兆性は

あの影の世界にすでに具現する

詩人よ、目を背けるな

湖面のざわめきを凝視せよ

それは内実を取り巻く外皮

形態に彫り上げられた

君自身にほかならぬのだから

東へ

——ピーター・F・ドラツカーに

賢人よ

あなたの魂は

何を見たか

文明の中心地に生まれ

東へとひたすら

旅を続け

かの白隠や仙厓を師とし

焼け付く日常の些事に

物見の霊眼を向け続けた

賢人よ

あの富士の白き峯を

さかまく松原の沖から仰ぐように

賢人よ

あなたを師としたことを
恥とはしない

黄金の酒蔵——死者たちを讃える歌

軒下すれすれに走るせせらぎ

いくつもの起伏とカーブを抜けて

クリスタルの鱧のように

まだらなす黄金のたまりを安らいで

あの酒蔵に筋をひいて流れ落ちる

数えきれぬ世の間

名づけられることなき琥珀の酵母の

言葉と霊のウイスキーを醸し上げる

飴色の小瓶につがれ

ディオニソスの饗宴の

テーブルに載るのを待つ

時代は酒蔵

人は酒

食道をせせらぎが流れ

臓腑に落ちていき

虹のような永遠を見せ

死者たちが語り始める

新しきものはなく

そのひとしずくが永遠と導通し

太古の幻影を見せ

死者たちとともに

輪舞する

蔵人よ

君の体と心と霊をめぐる

酵母のどこからきたかを

君は知らない

蔵人よ

君の蔵で醸せ

夕景の黄金の奔流

君の酒蔵を

実存を懸けて守れ

春の宵

たんぽぽ なずな ひなげしの花
森影は遙か

川面の残照

たんぽぽ なずな ひなげしの花

汀の銀

月は白く

たんぽぽ なずな ひなげしの花

濃厚な液汁

万象の古池

たんぽぽ なずな ひなげしの花

ちいさな神の暮らす丘

もう人生も

秋なんだから

あの丘に行こうか

苔むした庭園や

どんぐりのまばらな公園

古い神の棲まう祠

海に見える頂

時が流れつつ

止まっている

遠い記憶

太鼓の音

ささやかな一隅
うち捨てられた
ちいさな丘

ちいさな神の
ちいさなかまどとともに
暮らす丘

硫黄

——石橋湛山に

癒されてしまったら
何も書けなくなる
だから
打ちつけよ
あの重たいハンマーと鉄床との間で
マッチを擦れ
堅い野生の火花のように
脳漿を散らし
躊躇なく
逡巡もなく
断固たる偏見とともに
マッチを擦れ
冷えた自我を灼熱せよ

道標

地平に弾丸の放たれたように
一本の道の走る

明日へと続く道標

漂白の苦しみも

肉体をもつて生きる哀しみも

何もかもを知る

はるかアトランティスから

火山の死んでる欧州を抜けて

大西洋を渡ってきた

灰色に縁取られた道標

天上の序曲——レオノーレ第三番

一九八四年一二月八日、母にベルリン放送交響楽団の演奏会につれていってもらった日。
羽生市産業文化会館にて。

指揮者はハインツ・レークナー

知らない名前だけど

ドイツの音楽家に変わりはない

(カラヤンみたいなものだろうか)

赤い禁煙の四角い文字が

妙に記憶に残ってる

コントラバスを間近に見れば

まぐろが市場に水揚げされたか

あるいは一酸化炭素中毒で

何人も倒れてるみたい

ティンパニは二台

冬の朝の陽のように

バレンシア・オレンジ色に光っている

軽いざわめきと開始のブザー

楽団員たちが木の床を軋ませて

舞台上に上り定位置に

たいてい眼鏡をかけていて

いくぶんつかれたタキシード

オーボエ なんていう

つややかで哀しい音色だろう

黄泉の国で聴く

牧人の合図みたいだ

やがて全員を起立させ
拍手の通路に現れたのは
小柄で厚眼鏡のレークナー

眉間に刻まれる皺

親指をあらぬ方向に曲げ

じつにきつぱりと指揮台に立ち

やや前屈みに蝶ネクタイ

おもむろに楽団に向き直る

始まった

始まってしまった

レオノーレ第三番

いきなり全パートが律動し

巨人が重たい扉を開けたみたい
に ゆっくりと

ゆつくりと下がるレガート
フォルテッシモ

そういえば

世界が混沌だった頃
こんな音が鳴っていた

流れ流れてかげりと輝き

金管トリオに導かれ

谷間に吹くのびやかな風

柔らかな草を湿らせて

広い高原をかけめぐる

白や黒の羊たちが

牧草に身を横たえて

地平には楡の木が

灼けた墓標みたいに立っている

木陰に待つのはルートヴィヒ
小石をあつめて
破れズボンに手を入れて
不機嫌そうに立っている

(ところでこれは何だろう

母の本棚にあった

一冊の分厚い音楽事典

レオノーレはルートヴィヒが三回書き直して
ようやく完成させた作品で

中間部に豊かなファンファーレがある)

(確かに確かに

これがファンファーレだ

一本のシルバーのトランペット

思ったよりか細くて
遠い世界から響いてくる
鋭いけれども柔らかい

一九世紀はじめのウィーン
貴婦人たちは馬車に乗り
喇叭手の音色に耳を澄ませる
空は鈍色^{どんじき}今にもみぞれが
降り出しそうな
恐ろしくみだれた低い空

野末に立つのはルートヴィヒ
ここは街外れのぶどう畑
ハイリゲンシュタット
小川がしんと足下を濡らしてる

地平にからすが二羽はばたく
さても一陣の風
鉛色の雲
田野を巻き込んで
楡の枯れ葉がちいさく回り
混沌の世界が
一つの銀河系に
編み上げられていく

ヴァイオリン
ヴィオラ
チェロ
コントラバス
フルート
ピッコロ
(きちんとファゴットもつきあっている)

ぶどう畑が

空に溶け

一つの海になり

海原になり

巨大な凸^{とつ}レンズから

あの光が差ししてくる

ファイナーレ

臨終で聞くあの音色

さても金管の大号令

(天国はあなたたちのものだ

なぜなら悩める者は

天国を受け継ぐのだから

主よ、私の魂をお受け下さい

ステファノは叫ぶ)

ティンパニの連打

黒雲は裂けて光の柱は

波を撃ち地をえぐり

ルートヴィヒの魂を

天に迎え入れる

レクナ―、万歳

ルートヴィヒ、万歳

天界の大群衆

死の床で轟く音楽

レクイエム

見よ、すべてはあがなわれた
万軍の主

見よ、私は自由になった
ルートヴィヒの魂とともに

何もいらない

名も墓碑も、記憶さえ

ただ私がああ故郷に帰る日

レオノーレ第三番を一度だけ流してほしい

約束だ

いつかまた会おう

七重の時を越えて

井坂 康志

1972 年、埼玉県大利根町（現・加須市）に生まれる。

レオノーレ あるいは月影と水車

2017年 7月 7日 発行

著 者	井坂康志
発行者	文明とマネジメント研究所
本文デザイン DTP	稲岡淳一
印 刷	欧文印刷株式会社